# 循環型農業による“耕畜連携”から見えてくる食料自給率向上への取り組み！

後方に県北の名峰・那岐山。豊かな自然の中で飼料用稲の刈り取りが行われる。（2010年秋、奈義町）

## おかやまコープは、奈義地区など県内の循環型農業を応援！

地域経済の発展のため、県内産地と提携した「産直商品」の開発、普及を通じ、食料自給率の向上を目指し、食と農がつながる「地産地消」の活動を推進するおかやまコープ。その活動の一環が、飼料用稲（WCS）の活用推進だ。2010年度産、岡山県の飼料用稲総作付け面積（見込み）約283クタールのうち、24.9％にあたる約70.6ヘクタール（見込み）がおかやまコープが取り組みを応援している地域の作付け面積。今回はその中から勝田郡奈義町を訪ね、その意義と取り組みについて取材した。

【堆肥センターとは？】牛豚など家畜の糞尿を発酵乾燥させ、土づくりに役立つ堆肥を生産する場所。

奈義町などでつくられている飼料用稲とは、稲をロール状のかたまりにし、乳酸発酵させた家畜飼料で、ホール・クロップ・サイレージとも呼ばれる。飼料用稲の栽培はまず、地域農業の活性化と環境保全が期待される「と。第二に稲作農家と畜産農家の連携「耕畜連携」が図られること。これにより、稲作農家から飼料用稲の供給を受けた畜産農家（肉牛・乳牛）などの家畜に給与し、家畜の糞尿からつくられた堆肥が稲作農家へ還元される「循環型農業」が成立する。「循環型農業とは言うまでもなく、家畜飼料の国内生産力を高め、ひいては我が国の食料自給率を高めていく、未来のための取り組みである。

おかやまコープ提携農場の、奈義伍協牧場をはじめ、瀬戸内地区などの原料乳生産者が導入。県下様々な地域で耕畜連携が強まっており、おかやまコープ産直商品関連の飼料用稲の作付け面積も増加傾向にあるという。

おかやまコープ産直商品
「コープおかやま牛」飼料に配合！
WCS:ホール・クロップ・サイレージ
# 飼料用稲活用による食料自給率向上への取り組み

WCS:ホール・クロップ・サイレージ
# 飼料用稲で 地産地消 食料自給率向上

## コープおかやま牛生産農場 奈義伍協牧場を訪ねて

産直商品の利用拡大が食料自給率向上につながります！

コープおかやま牛を肥育する農事組合法人奈義伍協牧場は、中国山地に冠たる名峰のひとつ那岐山の麓、岡山県勝田郡奈義町の中心市街地からほど近い場所に位置する。

軒を並べる牛舎では、コープおかやま牛となるホルスタイン種など、800頭以上の肉牛を肥育。業務は朝からタタまで、餌やり、清掃、堆肥づくりと多岐にわたり、さらにその間にすべての牛の生育状況をチェック・ケアする眼力が要求される。

また、この牧場の歴史は長く、設立から37年、岡山産牛の肥育をスタートさせて四半世紀。県北の地で連綿と守り抜かれた牧舎の灯は、初代経営者から、その息子たちへと引き継がれもうとしている。そのひとりが豊福雅人統括場長と豊福祥旗さん親子だ。

「若い者同士で会をつくり、試食会をしたり、異業種交流をしたり色々と活動しているようですね」と目を細める豊福場長。一方、祥旗さんは、「目標は親父です。でもこれからの時代にフィットする牧畜経営を考え、実行するのは僕たちの役目だと思っています。消費者の皆さんに喜んでもらえる新しい牧畜をこの地域でつくりあげることが恩返しになると思っています」。

若者たちの意見の多くは、ベテラン肥育員たちに受け入れられ、信頼できる農場からの素牛導入、さらには飼料用稲の活用という耕畜連携の推進に活かされているのだという。

「最大限のネットワークと最大限の信頼の下、何より大切な愛情をそそいで育てています。ぜひ召し上がってください」と熱く語る青年牧畜家を微笑みながら見つめる父、とかく親子の絆がきしみつつあると言われる現代、さらに後継者不足が嘆かれる農業にあって、この場所には、強い絆と「未来」がある。

統括場長の豊福雅人さん（右）と祥旗さん親子。大学で学び4年前、ふるさと奈義町に帰郷した祥旗さんは、豊福場長にとって、今や孝行息子以上の存在であり、ともに牧場を支える信頼のパートナーだ。

## 「未来へ」父と子の想いはひとつ。

## 牧畜の誇り・至高のチームワーク

▲牧場内にある堆肥生産プラント
▼飼料用稲 餌やりの様子

「こだわり育ち商品」は優れた特長をもった産直商品です。
「こだわり育ち商品」は、産直野菜・産直果物・産直水産物・産直たまご・産直米・産直牛乳のやでそれぞれの基準に基づき、優れた特長をもった産直商品のブランドとして、商品の開発、普及に取り組んでいます。

「おかやま育ち商品」は県内産直商品と県内生産物を原料にした商品です。
「おかやま育ち商品」は、主要原材料に岡山県産の農水畜産物を使い、おかやまコープおよびJ.コープCSネットが開発した商品と県内産直商品をいい、商品の開発、普及に取り組んでいます。

## 飼料用稲による安心で美味しい県産牛肉を

岡山県農林水産部畜産課　総括参事　**若田茂氏**

わかた・しげる
1955年岡山県真庭市（旧落合町）生まれ。
1977年岡山県に奉職後、畜産一筋。2009年から現職。行政から家畜衛生、食肉流通まで幅広い知識の持ち主。家畜では和牛と水稲で循環型農業を実践。週末にはご両親と大地で汗を流す。

岡山県は、中国四国地方で一番の牛肉・牛乳の生産県です。長引く景気の低迷による畜産物の消費減退や飼料価格の高止まり等から畜産経営は厳しい状況ですが、安心な畜産物を望む声に応えようと畜産農家では、海外に依存していた粗飼料を耕種農家と連携して飼料用稲等に切り替えるなど、県内産の粗飼料を活用した美味しい牛肉を提供する取り組みをスタートさせています。県では、この取り組みが循環型農業の推進や食料自給率の向上による地域農業の活性化に繋がるものと考え、飼料用稲を利用した畜産物の生産体制を積極的に推進しています。

消費者の皆様には、「こだわり」をもって作り上げた牛肉を是非ご賞味頂くと共に、県産牛肉を応援して頂けるよう期待しております。

## 畜産農家と手を取り合い地域発展を

WCS生産者
株式会社ライスクロップ長尾 代表　**長尾隆大氏**

ながお・たかとも
1943年 岡山県勝央町生まれ。
1994年、50歳から起農し、奈義町にライスクロップ長尾を設立。通常米の作付け・管理をはじめ、飼料用稲の栽培に尽力する人柄は温厚で知られるが、内では旺盛な挑戦心とあふさぐ人の思いが燃えさかる。

会社を立ち上げてから、奈義伍協牧場さんとの出会いがあり、お互いの良さを循環させていこうと…。それを契機に耕畜連携を進めてきました。この地域（奈義町）は自然環境がとても厳しく、試行錯誤の連続でしたが、3年をかけ、飼料用稲の生産を軌道に乗せました。

余った農地の再活用と言ったら語弊があるかもしれませんし、家畜の餌をつくるという点に抵抗を感じる生産者も当初はいたと思います。しかし農業のみならず、地域発展という観点に立てばそれらは取るに足りないこと。畜産農家と手を取り合って地域発展をめざすためには、大きな面積を管理し、有効活用することが大変重要です。